

聖書：ローマ 12：14～16

説教題：迫害する者を祝福し

日時：2016年5月22日（朝拝）

1～11章で素晴らしいキリスト教教理について見て来た私たちは、12章以降でその教理に基づく実践について学んでいます。9節以降では「愛」というテーマで語られています。9～21節は3つの部分に分けることができます。一つ目が9～13節、二つ目が14～16節、三つ目が17～21節。今日はその内の真ん中の部分になります。

まずここで言われているのは「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。」これはクリスチャンが、そうではない外部の人々から嫌がらせを受ける時のことです。「キリスト教」と「迫害」は切っても切れない関係にあるものです。なぜキリスト教に迫害はつきものなのでしょう。それは何と言っても私たちが住むこの世は、私たちの主イエスを十字架に付けた世だからです。ですからその主イエスに付くという立場を明らかにするなら、この世から同じような扱いを受けることは避けられません。ヨハネ 15章 20節：「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」確かに今日の日本にある私たちは、以前のある時代・ある国の人々に比べたら、ずっと迫害は少ないと言えるかもしれません。しかし今日でも信仰を持てば皆が良い顔をするわけではありません。家族や友人が反対するという中に置かれる人も多くいます。あるいは様々な社会やグループで陰口を言われたり、何かあると嫌われたり、仲間外れにされたり、嫌がらせをされる場合もあります。Ⅱテモテ 3章 12節：「確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」ですからもし私は少しも迫害は経験していないと言うなら、自分を吟味してみるべきです。それは私がこの世と調子を合わせて、この世の人のようになっているからではないのか。妥協した生活を送っているからではないのかと。イエス様は山上の説教で「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき」、喜びなさい、喜び躍りなさい！と言われました。なぜならそのように人々から扱われているということは、預言者たちと同じ立場に立っていることの証明であるからということです。それはその人が救いの民であることのトレードマークであるとさえ言われています。

さてこのように人々から不当な扱いを受ける時、私たちはどう対処すべきでしょうか。ここでその人を「祝福しなさい」と言われています。これはキリスト教の驚くべきメッセージです。これはイエス様の山上の説教の言葉、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」を反映しています。私たちはひどい仕打ちを受けたら仕返ししたくなります。相手の人に悪いことが起こるようにと心ひそかに願います。しかしパウロはイエス様と同様、祝福すべきであってのろってはいけないと言います。そこに悪い思いが混じってはいはならない。真心から相手が祝福されるように祈れ！と。一体どうしてこんなことができるかと思えます。私たちの生まれながらの性質ではとてもできないことでしょう。しかしすでに見た12章2節に「心の一新によって自分を変えなさい。」とありました。すなわちこれは聖霊によって心が新たにされた人が行なうことのできるものであるということです。

なぜ私たちは自分の敵を愛し、迫害する者を祝福すべきなのでしょう。その理由は、まず神が私たちにそうして下さったからでしょう。マタイの福音書18章21節からの部分には一万タラントを赦されたしもべのたとえがあります。1万タラントは今日に換算すれば約6千億円になります。私たちはそのような到底返済不可能な負債を神によって赦していただいた者たちです。そのことを心から感謝して、私たちも他の人に対して同じようにするようと言われています。しかしたとえの中の1万タラントを赦された人は出て行って100デナリ貸しのある人、今日に換算して100万円貸しのある人を見つけ、その人を赦さず、牢屋にぶち込んでしまいました。これを聞いた王が悲しんで、彼を呼び出し、こう言います。「悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。」そして先の赦しを取り消し、彼を獄吏に引き渡しました。私たちはどうでしょう。神が自分にしてくださったことを感謝するなら、私たちも他の人にそのようにすることによって、神への感謝を表すべきではないでしょうか。

私たちはこのように神への応答としてこのことを実践すべきですが、自分の敵を正しくあわれむために、相手を正しい目で見ることができません。その模範を十字架におけるイエス様の祈りに見ることができます。イエス様は十字架に張り付けにされた時、人々のために祈られました。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」特に注目したいのは、イエス様は十字架上で苦しい状態に置かれていながらも、非常に冷静に人々の状態を見ておられたことで

す。普通、私たちはこのような仕打ちを受けたらカーッとしてしまいます。そして頭がカーッとになったら、もう正しい判断はできません。自分をコントロールできなくなります。しかしイエス様は彼らの状態をよく見ておられました。ご自分に向かって反抗しているという表面的な姿ではなく、その根底にある彼らの真の霊的状态を。なぜ彼らはこんな態度を取っているのか。それは「自分のしていることが分かっていないから」です。もし自分のしていることが何であるか分かっていたら、とても神の子に対してこのような態度を取ることはできません。それができる理由はただ一つ、自分のしていることが分かっていないからです。イエス様はその彼らの霊的状态を見つめて、あわれまれました。私たちも同じでしょう。なぜある人はゆえもなく、私を迫害し、嫌がらせをして来るのか。その答えは端的に言えば、その人は自分のしていることが分かっていないからです。キリストを信じ、キリストに付く者をさげすむことができるのは、霊的な目が開かれていないから。サタンのとりこになってまだ霊的暗やみの中にいるから。そのことを見て取るなら、私たちは相手の人を本当にかわいそうに思うべきでしょう。私たちも以前はその状態にありました。そのことを思うなら、同じ土俵で張り合っている場合ではありません。何とかその人に神の祝福が注がれ、救いが与えられるように祈らなければなりません。そしてできることは何でもしてあげなくては、と思わなければならない。このように聖霊の導きを頂いて、私たちは進んでこの命令を行なうように導かれるべきではないでしょうか。

もう一つ今日見たいのは15節と16節です。こちらは兄弟姉妹との関係に関するものと言えます。まず15節に「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」とあります。私たちは私たちよりも明らかに低い立場にある人に良いことが起きるなら、「本当に良かったですね」と共に喜ぶことができます。しかし自分と同じような立場にある人、あるいは自分よりやや下にいたと思っていた人が自分を乗り越えて祝福されるのを見るとどうでしょう。起こりがちなのは、嫉妬、ねたみ、悔しい思いです。そのニュースを聞いて、「良かったですね」と口では言いつつも、素直に喜べない。あるいは泣く者についてはどうでしょう。親しい人に不幸が起これば何とか助けたいと親身に関わりますが、一方で下手に関わりたくないとも思います。関わると何かしてあげなければならなくなる。エネルギーが取られ、面倒なことになる。そのことを計算して、そばに行つて一緒に泣くことをしない。

そんな私たちにこのことができるのであれば、やはり2節にあったように、聖霊による

新しい心を与えられることによってでしょう。聖霊に導かれて私たちが知ることは、私たちの救いは個人個人バラバラなものではないということです。私たちは「一つのからだ」として救われます（4節）。私の救いとからだ全体の救いは一つの事柄です。私たちは互いに一つに結ばれていて、すでに神によって、16節に記されている「一つ心」を与えられています。その一つ心を益々尊んで、これを促進するようにとされています。ですから私たちは兄弟姉妹に喜ばしいことが起こったら一緒に喜ぶのです。なぜなら一人の兄弟に起こったことは必ず私の益にもなるものとして神によって与えられているからです。すぐにそう考えられない場合は、こう考えても良いでしょう。私たちがしばしばこの世で他人の祝福を喜べないのは、その人に祝福が行くと私はそれにあずかれないと思うからです。つまり祝福は限られていると思っている。あの人にそれが行くと私にはそれがなくなってしまう、と。しかし私たちは今や違う見方を持っています。神は無限に祝福を持っておられる方なので、誰かに祝福が行っても、それで私への祝福が減るということはない。神は私には私への祝福をきちんと用意して下さる。だから私たちは狭い心でねたまず、他の人に神が与えた祝福を大いに喜んで良いのです。そして実は先に見たように同じからだに属する兄弟姉妹の祝福を通して私も祝福されるようにと神によって意図されています。ですから私たちは積極的に喜ぶべきなのです。共に泣く方も同じです。私たちは一つからだであって、兄弟姉妹の痛み悲しみは現実私に痛み悲しみでもあります。もちろん私一人でその重荷を担うことはできませんが、私たちにハシラなるイエス様がいてくださいます。その主をともに見上げて、共に恵みを祈り求めるという支え合いができるのです。

この主にある一致を保ち、促進するためのことが16節でこう言われています。「高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思っ  
てはいけません。」 高ぶりほど私たちの交わりを破壊するものではありません。他者を見下げる態度が互いの交わりを容易に破壊します。そうならないために心がけるべきことが「かえって身分の低い者に順応しなさい。」ということです。これはこの世の価値観ではなく、神の国の価値観でものを見るということです。ここで言われている身分の高低は、この世の判断です。それを教会に持ち込み、それでお互いを見、評価し合うなら、そこには分断が生じます。しかし御国の基準で見ると、身分の低い者も高い者も同じ兄弟姉妹です。どんなに身分が低い人でも神が愛しておられる立派な民の一人です。ヤコブ書2章2～5節：「あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、りっぱな服装をした人が入って来、またみすぼらしい服装をした貧しい人も入って来た」とします。あな

たがたが、りっぱな服装をした人に目を留めて、『あなたは、こちらの良い席におすわりなさい。』と言い、貧しい人には、『あなたは、そこで立っていなさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい。』と言うとすれば、あなたがたは、自分たちの間で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になったのではありませんか。よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。」ですから私たちは御国の価値観で生きていることを示すために、むしろ身分の低い者に順応すべきなのです。何よりもイエス様がそのように歩まれました。教会のかしらなる方がそのように身分の低い者に順応して歩まれたのに、私たちがそうでないとしたら、何と矛盾したことになるでしょう！むしろ色々な意味で低い立場にある人を大事にすることによって私たちは主にならう歩みができるのです。そして主が与えて下さっている一致と平和をより良く保ち、促進するように導かれるのです。

以上のことは私たちの生まれながらの性質には全く反することです。私たちはひどいことをされたらやり返し、人の喜びは喜ばず、自らを誇って一致を壊しやすい者です。そんな私たちが今日の御言葉を実践するためのカギは、もう一度 12 章 1 節に戻って、自分に与えられている救いを心から喜ぶことではないでしょうか。私たちはこの世の厳しい戦いの中で、ともすると与えられている素晴らしい救いを忘れて、自分で自分を救い出さなくては！と駆り立てられてしまいます。そう思うと私たちの心には余裕がなくなり、私の邪魔をする人は赦しておけない、だから直ちにやっつけなければならないと駆り立てられます。しかし私たちは 1~11 章で見て来ましたように、イエス様の贖いのみわざにより、その十字架と復活という不動の岩に基礎付けられて、今や必ず栄光の救いに入れて頂く者となりました。たとえ私の目に良いとは見えないことがあっても、すべてを働かせて益とする神が、今日も私の上に偉大な御手を置いて導いて下さっています。神の計画以外のことは何一つ起こっていません！この神とその救いを心から感謝し、喜び確信しているなら、私たちは目の前で起こることにいちいち驚かない。自分の非力な力で無理無理自分を救い出そうとあわてなくて良い。むしろ御子にあって自分は確実に救われることに安心して、あとは神に喜ばれるようにと歩むことにのみ集中すれば良いのではないのでしょうか。パウロはその神のあわれみに対する私たちの応答として「迫害する者を祝福しなさい」また「互いに一つ心になり、身分の低い者に順応しなさい」と言いました。これは単なる命令や義務ではなく、私たちの感謝を神様に表す道なのです。神が下さった救いに心から感謝しているなら、あなたはこのような歩みに自分の感

謝を表しなさいと言われている。そして私たちがそのように歩むなら、神はご自身に対する礼拝として喜んでお受け下さり、さらに私たちに祝福して下さる。その神が招いている応答の道、祝福の道、礼拝の道に、私たちは私たちの感謝を告白して進みたいと思います。